

クラス中の目が教室のドアに注がれた。期待に満ち溢れた空気の中、ロビンソンは入って来た。

「グン モーニン」――

大阪北部の女子高校。新学期を迎えた高一の私はクラスメート達と興奮していた。

週一回の外人講師による英語の授業。前年度までの講師の任期が終了し、今年から新たな外人講師に代わるという情報を得ていた。

「ロビンソン」という名の二十五才のカナダ人。それだけで皆、勝手な妄想を抱きつつ、まるでハリウッドスターを待つファンのような心境でワクワクしていた。――

ロビンソンなる人物は私達を見渡して、もう一度笑顔で言った。

「グン モーニン」

しかし、強烈なショックで呆然となった私達は挨拶を返すことが出来なかったのである。

ああ、なんという現実。目の前のロビンソンは肝っ玉かあさんのような大きな体の女性だったのである。二五才のカナダ人という情報はあっていたが、まさか女性とは。

大きな太い腕で黒板に自分の名前を書いていた。

（全然話が違うやん）

（ロビンソンで誰かて男と思うやろ！）

（お相撲さんちやうのん）

ザワつく教室。皆、口々に毒つき始めた。

思うに女子高生というのはいつの時代でも本質は同じだ。四十年前の私達も単純で軽薄だったし、勝手な妄想で盛り上がり、落胆したり。夢を見ては現実の厳しさにへこたれたり。今だから笑えることだけれど。

そんな私達だったがいつのまにか自然に彼女を受け入れていた。休み時間に廊下で会って、

「センセ、夏場所ががんばってや」

「ダイエットしたらモテるで」
などとからかった。彼女が笑いながらゲンコツを振りあげる仕草が可愛かった。私達の日本語を理解しているのかどうかわからなかったが、明るい彼女は皆から愛されている友達のような存在になっていった。しかし、英語の講師という自分の立場を踏まえてなのか、決して日本語は話さなかった。

私は彼女の朗読が好きでうっとり聞き入っていた。少しハスキーでリズムカルな英語はとても心地よく響いていた。

三学期になって最初の授業の時、副担任が入ってきて今日は自習をするように、と告げた。

「ロビンソン先生は？」

と問うと、何でも彼女のお母さんが急に亡くなられて、昨日の朝に取る物も取り敢えず帰国したらしいとの事だった。

皆、驚いて顔を見合わせ、

「え・・・？ ロビンソンかわいいそうやなあ」

「うん。帰ったんやね」

重くて苦しい時が流れた。

心配していたが十日ほどでロビンソンは帰って来た。疲れた表情はしていたものの、以前と変わらぬ体をゆっさゆっさ揺らしながら入って来て、お休みしてごめんなさい。というような意味のことを英語で喋って授業に戻った。そしていつものように本を読み始めた。

「ああ、この声、やっぱいいなあ」

と思っていたら、しばらくして声が途切れた。どうしたのかと思って見上げたら、なんとロビンソンが教科書の上に、ボタツボタツと涙を落としていたのだ。

気づいた皆も、

「センセ、どないしたん？」

と言いながら一斉にかけ寄った。大きな肩が小さくふるえ、声をこらしてロビンソンは泣いていた。その背中をさすり、頭をなで、皆は口々に言った。

「お母さん、気の毒やったねえ」

「思い出してしもたん？」

「泣いたらええねん、がまんせんと」

「つらかったやろね」

ロビンソンは涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げ、サンキュウと言い、

『ダイジョウブ』と、うなずきながら言った。

それは皆が聞いたロビンソンの初めての日本語だった。さする手を握り返し、見渡して何度も何度も『ダイジョウブ』をくり返した。

少しも「大丈夫」ではないはずの『ダイジョウブ』は弱々しいカタカナだったけれど、ロビンソンと私達だけの大切な日本語になった。

『ダイジョウブ、ダイジョウブ』

せつなく、かすれた声で、そして少しはにかんで、くり返される日本語に、私達も涙が止まらなかった。

カタカナや横文字は今ではあたり前のように生活に定着し、誰もが何の抵抗もなく使っている。

ことばの本質が人の心のつながりを担うものだとしたら、ロビンソンの日本語は、気持ちの中からとび出した一つの正実であった。

その時の私達の感情が、今も心に残るのはあの日本語がロビンソンそのものであったから。ロビンソンの愛から生まれたことばだったからだ。

現在も続く同窓会のサブタイトルは 『ダイジョウブカイ』となっている。

しかも、二・三年前から 『ダイジョウブカイ(笑)』がつけ加えられている。